

## 中村哲が 生涯をかけて 示したこと



中村哲さん襲撃事件の現場近くを訪ねた一行。中村さんの写真が掲げられていた。(2022年12月、アフガニスタン東部ジャララバード)

# 非軍事の支援で自立へと歩を進めるアフガニスタン 農地は拡大、新たな用水路も着工 「ドクター・ナカムラは心の中に」

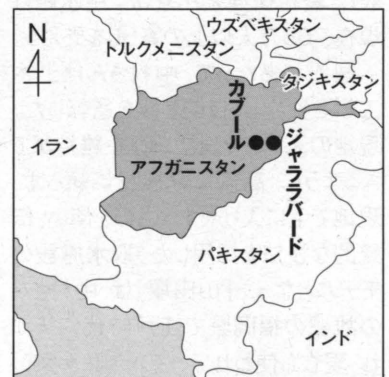
戦乱や大干ばつで苦しむアフガニスタンの人々を医療、灌漑、農業で支援してきた中村哲医師。だが、2019年末、凶弾に倒れた。その後、現地はタリバンが権力を掌握し、混乱も報じられた。支援活動はどうなっているのか？——中村医師の活動を支えたNGO「ペシャワール会」の代表らが昨年末、現地入りした。(写真提供／PMS・ペシャワール会)

佐々木 亮

### 町はにぎわい、 人々に活気が戻った

中村哲医師が2019年12月に73歳で凶弾に倒れて以降も、アフガニスタンでは中村さんが率いた現地のNGO「PMS」(ピース・ジャパン・メディカル・サービス)平和医療団・日本)が活動を続けている。農地は広がり、新たな用水路建設も進む。このほど現地を訪ねた「ペシャワール会」(事務局・福岡市)の村上優会長らに最新の現地の様子を聞いた。

一行は村上さん、ペシャワール会PMS支援室長の藤田千代子さんら約10人。昨年12月にアフガニスタンに入った。治安の悪化やコロナ禍で訪ねることが難しくなっていたため、会のメンバーが東部ジャララバード近郊の活動地域を訪問したのは、中村さんの没後初めてとなった。土木技術の専門家





難工事を自分たちの手で成し遂げ、喜ぶアフガニスタンの人々たち。(2022年2月)

も参加し、オンラインでのやりとりだけでは細部を把握しづらい用水路や農地の現状などを直接確認したという。

用水路が潤す一帯は、緑がいつそう濃くなっていた。藤田さんらがかつて護岸のために植えた苗木は、幹がひとかかえもある大木に育っていた。畑では麦やサトウキビ、オレンジ、レモン、ニンジン、カリフラワーなどが実り、道路沿いには農産物を山積みにした店が増えていた。敷き物を広げてくつろぐ人たちは「こっちに来て、お茶でも飲んでいきなさい」と笑顔で手招きしてくれた。

村上さんが今回の訪問で強く印



パキスタンの難民キャンプで1980年代、診療をする中村哲医師(中央)。

### 増え続ける農地 めざした平和がここに

象に残ったのは「治安のめざましい改善」だったという。12年前の前の訪問では、駐留する外国軍の兵士や装甲車、ヘリコプターの姿があちこちで目に入り、住民が強い不安や緊張がひしひしと伝わってきた。それが今回は、街がにぎわい、行き交う人や車の数が増え、活気ある表情から「長く続いた戦乱がなくなった」という安堵が感じられた。さまざままな批判も受けているイスラム主義勢力タリバンだが、内戦状態に陥ることなく権力を掌握した背景には「戦乱より治安を求めるアフガニスタン国民の大半の支持があったということだ」と、村上さんは指摘する。

用水路によって潤された農地は、中村さんが亡くなった時、福

## 中村哲さんの活動

中村哲さんが、「ペシャワール会」の名称の由来にもなったパキスタン北西部のアフガニスタン国境に近いペシャワールへ、ハンセン病治療のために赴任したのは1984年のことだ。難民キャンプや国境付近の山岳地帯での医療支援を経て、活動の重心をアフガニスタンへと移していった。

2000年、大干ばつがアフガニスタンを襲った。村を捨てて難民化する人々を目の当たりにした中村さんは、水を確保するために1600本以上の井戸を掘った。03年からは用水路を建設し、農村復興をめざした。用水路は現在、65万人以上の暮らしを支える。

建設にあたって、中村さんは土木工学を独学し、自ら重機を運転した。現地の人たちで建設・管理・維持ができるように、高価な資機材に頼らず、現地で手に入りやすいものを使い、伝統的な技法を採用した。取水施設のモデルとなった「山田堰」は、中村さんの故郷の福岡県で江戸時代に築かれ、現在も使われている。(佐々木亮)

岡市の約半分にも匹敵する1万6500ヘクタールに達していた。その後も現地の人たちが農地を広げ、「今では2万3800ヘクタールに拡大した」と、PMSのスタッフから報告を受けた。難民となっていた人たちが戻り、用水路によって安定して農業ができ、家族で安心して暮らせる見通しが立つと、さらに農作業と開墾に力が入る、という流れが生まれていた。中村さんは常々「故郷で家族と毎日三度のご飯を食べられる。これがアフガニスタンの人たちが望む幸せ」と話していたが、村上さんは「このシンボリックな表現に込められた、中村先生のめざした平和が、ここで実現している」と感慨深かった。

昨年完成した新たな取水施設「バルカシコート堰」の地元では、子どもたちが日の丸の小旗を振り、長老たちが出迎えてくれた。交流の席で、村上さんのあいさつを通訳していた藤田さんが「中村先生はもういないけど……」と言いかけて言葉に詰まると、長老の一人が中村さんの肖像写真を指し示し、その両手を自分の胸元に当ててうなずいた。「ドクター・ナカムラは私たちの心の中にいる」と仕事か語っていた。「みんな同じ思いなんだ」と、藤田さんは心が温かくなった。

### コロナ、制裁…相次ぐ試練 干ばつは今もなお

コロナ禍、続く干ばつ、一転して洪水……と、ペシャワール会とPMSにとって、中村さんを失ったからの3年間は一難去つてまた一難の日々だった。中でも、大きな試練となったのは、タリバンの復権に反発する米国による経済制裁だった。

21年8月にタリバンが権力を掌

握した直後、PMSは活動を一時休止した。だが、混乱を恐れて閉まっていたバザール(市場)や両替所がほどなく再開すると、日常の安全を見極めて活動を順次再開した。

一方、タリバンに批判的な米国は、アフガニスタン中央銀行が米国内に預けている資産を凍結した。このため、アフガニスタンでは銀行に現金が不足し、預金の引き出しが制限された。日本からの送金も難しくなった。

PMSは当時、バルカシコート堰を着工したばかりだった。洪水でダメージを受けた既存施設の修復にも迫られ、機材や燃料費の資金繰りに苦心した。さらに医療支援では、資金不足で休止する医療機関が相次ぐ中、患者を受け入れ続けたPMSの診療所はいっそう頼られるようになった。

そうした状況で資金を補ったのが農業収入だ。PMSの農場では果実や野菜が実り、酪農や養蜂にも取り組んでいる。防砂林として植えたヤナギやユーカリを間伐し、薪にした。これらを販売し、日本円で2000万円ほどの収益があがった。

日本からの幅広い支援も続いている。活動はペシワール会の会費と寄付によって支えられているが、中村さんの没後、あらためて活動を知った人たちが入会し、会

員はこの3年で約1万人増えて約2万6000人となった。

経済制裁はその後、国際社会からの批判を受け、人道支援を目的とした送金は緩和されたが、まだ「元に戻った」と言える状態ではないという。インフレや円安、ロシアのウクライナ侵攻に伴う石油高騰も重くのしかかっている。

さらにアフガニスタンでは干ばつが今なお続いている。今回の訪問でも、PMSの活動する地域を一步出ると、干上がった大地が目に見え、飛び込んできたという。

アフガニスタンは元々、人口の8〜9割が農民とも言われる。中

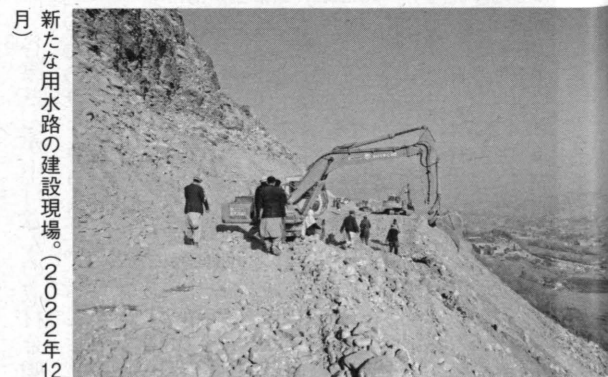


用水路が潤す大地でたわわに実った稲を刈る。(2022年9月)

村さんは「復興は軍事ではなく農業から」と訴えていた。「あと20年は活動する」とも語り、近年は国連機関や国際協力機構(JICA)と連携して、PMS方式の灌漑技術をアフガニスタン全土に広めて農村を復興しようと考えていた。各地から集まった人々を現場での作業を通じて実践的にトレーニングし、ノウハウを学ばせようとしていた。用水路建設で得た知見をもとに、手引書となる「ガイドライン」をまとめようとしていた。

## 完成したガイドライン 「自立」に向けて

中村さんの没後、ペシワール会は「中村先生が実践してきた事業は全て継続し、彼が望んだ希望は全て引き継ぐ」との方針をいち早く打ち出した。土木技術の専門家が名乗りを上げ、現地に技術的なアドバイスをする「技術支援チーム」を発足させた。アフガニスタンとの往来が思うようにできない中でオンライン会議を頻繁に開き、情報を共有し、日本側から助言をしてきた。「ガイドライン」



新たな用水路の建設現場。(2022年12月)

はJICAの協力を得て引き継がれ、21年に完成し、日本語・英語・タリ語・パシクトゥー語版が刊行された。「この3年、手探りしながら、PMS支援室や技術支援チームの集団体制を確立させてきた」と、村上さんは振り返る。

そうした支援も受けながら、バルカシコート堰は中村さんの没後にアフガニスタンの人々だけで着工し、完成させた初めての灌漑施設となった。さらに昨年10月から、新たな用水路の建設工事が進められている。

中村さんが掲げた「あと20年」、さらにその先の「アフガニスタンの自立」をめざし、活動は立ち止まることなく続けられている。

..... ささき りょう・フリーランスライター。